

6 音 楽 科

登 浩二・福田秀範

1 「豊かな感性を育む」音楽学習を振り返っての成果と問題点

音楽科では、子どもたちがさまざまな表現及び鑑賞の活動を通して豊かな音楽体験を積み重ね、音楽のよさや美しさに触れながら、心豊かに生きていくことのできる資質や能力を身につけていく教育の充実を目指している。

このような教育を実現していくためには、新しい学力観に立った授業を創造し展開していくことが強く求められている。すなわち、教える側から立った授業への転換を図り、子ども一人ひとりが進んで自分のよさや可能性を発揮しながらよりよい音楽を求め、主体的で創造的な表現及び鑑賞の活動を進めることができるよう、子ども一人ひとりの立場に立つ授業の工夫・改善を図る必要がある。

その具体として音楽科では、子ども自身の心で感じることを音楽教育の出発点であると捉え、自ら感じ・気づき・考え・表現していくといった4段階のステップを包含した題材設定を行い研究を継続してきた。

その成果として授業や音楽朝会などで伸び伸びと明るい子ども、すなわち自分が思ったことや感じたことを、素直に表現しようとする子どもが増えてきたように感じられる。それは例えば、東雲音楽隊への参加希望者の確実な増加や、社会教育団体としての児童合唱団等への参加率（平成5年度0名→平成8年度15名）の増加などからも感じられることである。これは、おそらく音楽を通して自分自身をなんとか表現したい、あるいは自分のもっているものを音楽的表現を通してみんなに認めてもらいたいという現れなのかもしれないと考える。

しかしその一方、授業そのものに焦点を当ててみると、各学年を通して、ある問題あるいは課題についてどう考えたらよいかについて、教師が道筋を示し「こんな方法で、こうやってみたら」というかなり具体的な指示がないと、なかなか自分たちでは動き出そうとしないといった一面も共通して見られる。また、学習過程においても何か粘り強さが感じられにくく、もう少し突っ込めばおもしろくなるのにあきらめが早く「この程度でいいや」「そこそこ楽しければいいや」といった割り切りが、子どもたちの学習姿勢から感じられることも少なくない。これは、一人ひとりのよさを伸ばす以前に、ごく常識的な意味での学習の基礎（取り組みの姿勢・根気）ができていないのではないかという危機感すら持たせる。

結局、学年が上がるに従って音楽の学習について何となく切実感を感じなくなってきたのではあるまいかという問題点が浮かび上がってきた。

2 なぜいま自立が必要なのか

これまでの本校における「めあて追究」の一連の研究から「学習に対する切実感」の問題は幾度も取り上げられ、その成果は初等教育誌でも発表されてきた。それらを要約すると、子ども自身が「こうしたい」「ああしたい」と切実感をもって学習するためには、まず学校や家庭の生活の中で切実感に結びつくようなものがなくてはならない。特に学校の中では、子ども達自身で学習の問題を解いていく過程や、生活の中で見つけた課題をよりよく実現するような取り組み方について、自分たちで考えるようにしたり追究したりする時間的なゆとりを用意しなくてはならないというまとめ方もできるであろう。

このことを音楽の学習にあてはめてみると、次のような問題点が考えられる。

これまで、この題材にはとても心をひかれるものがあるからもう少しやってみたいという欲求があったとしても、題材全体の進行や他の学級との兼ね合い、また研究会や教育実習などいろいろな条件によってそれらがなかなかできないで、結果的には与えられた条件の中でしか動けない。それらが繰り返されることにより「この程度で」という安易な妥協が教師の中にも、子どもの中にも培養されていったのではあるまいかという点である。つまり子どもに自立を期待する前提として、こうした現実からまず教師が自立する必要があるのではなかろうか。

3 自立へ向かう子どもたち

これまで考えてきた問題点を整理していくと、「なぜ音楽の学習をしなくてはならないのか」という原点が問われることになる。これは、豊かな現代社会において音楽そのものの価値感が多様化し、いわゆる教育音楽が何か子ども達の日常生活にあふれている音楽と比較して、異質なものと変容していることにも背景にある。いずれにしても、子どもたちが自分たちの生活から、音楽に対する課題意識を高め、それがまた自分たちの生活に戻っていくような学習のパターンを設定することにより、音楽に対する切実感を深めるように題材設定の工夫を行うことが重要であろう。そして、子どもたちがしっかりとした「自分なりの音楽観」（私はこういう音楽が好きなんだというこだわり）をもつことが自立の一つの具体像ではないかと考える。そして学習過程における、具体的姿として以下の3つを挙げたい。

- 音楽の基礎能力を身につけ、進んで音楽活動をしている。
- 音楽活動をする中で、主体的参加の実感を味わっている。
- 音楽を通して、子ども同士や教師との関係を深めながら、感動を共有している。

4 今後の課題

- ◎ 主体的に活動できる時間と場を設定する。そのために、題材構成の工夫及び教材の厳選についての研究を継続する。
- ◎ 学校行事と音楽活動との関わりをさらに深め、校内の音楽的雰囲気を高める。そのために、下記の活動を実施していくための具体方法についての研究を継続する。
 - 児童による創作活動を重視した、しののめ発表会に向けての長期的取り組み。
 - 放送委員会と連携し、各学級の音楽的表現を放送。（段階的に実施中）
 - 東雲音楽隊を発展させた一つの形として音楽委員会を発足し、学校行事の中に活動の場を位置づけ、全校的な音楽活動を高める。
 - 全校児童を対象とした自主参加によるミニコンサートや縦割り班を活用したバンド結成など、多様な音楽的表現の設定。
 - 瞬間芸術である音楽的表現の記録として、年度毎に各学年の演奏や全体合唱曲等を取めた「東雲音楽アルバムCD・うたごころ」編集の計画。